

原著 (Article)

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (XII)

——新出北粕谷区本の階層的クラスター分析による分類——

**Kumano-Kanjin-Jikkai Mandara and Its Roots (XII):
Classification of a New Found Figure, Kitakasuyaku's
Collection, by Hierarchical Cluster-Analysis Technique**

宮川 充司*
MYAKAWA, Juji*

要 旨

熊野観心十界曼荼羅は、江戸初期から中期にかけて、熊野比丘尼と呼ばれた女性宗教者が熊野の勧進のための絵解きに用いたと伝承のある宗教民俗絵画である。この絵画は、熊野比丘尼達が所持していた痕跡が確認できるものを定型本と呼び、類似の絵画構成要素をもつが図柄が異なる別本、定型本を後代に模写したと推定できる模写本に分類されている。42点の定型本の所在が確認され、甲乙丙の3系統・I～XIの形式に分類する小栗栖分類が標準となっている。新出の熊野観心十界曼荼羅北粕谷区本について、構成要素をコード化し、階層的クラスター分析による分類テクニックを適用したところ、定型本甲系統II形式に分類できる位置づけとなった。

キーワード：熊野観心十界曼荼羅，北粕谷区本，新出定型本，小栗栖分類，階層的クラスター分析

Key words：Kumano-Kanjin-Jikkai Mandara, Kitakasuyaku's Collection, New Found Standard Figures, Ogurisu's Classification, Hierarchical Cluster-Analysis

室町時代後期から江戸時代中期にかけて、熊野三山への勧進のために熊野比丘尼と呼ばれた女性宗教者が各地で活動していたといわれる。その熊野比丘尼達が、勧進のための絵解きに使用したのではないかと考えられていた民俗絵画の1つに、熊野観心十界曼荼羅がある。この民俗絵画史料に関する研究は、萩原（1983）に始まり、その学術的研究は小栗栖（2004）により体系化され、さらに小栗栖（2011）により完成の域に到達したといっても過言ではない。この熊野観心十界曼荼羅は、日本の美術史においては鎌倉時代以降盛んに描かれてきた六道絵・地獄絵の流れを汲むその集大成というような位置づけをもっている絵画である。同時に、萩原（1983）により「老いの坂」と名付けられた、人の一生を山に登り下るというイメージで描いている独特の構成要素を具有している特徴がある。

この絵画史料を、小栗栖（2004）は、それまで多様な内容・様式の絵画を同列にあるいは非体系的に扱われていた42例の熊野観心十界曼荼羅を、32例の定型本、6例の

別本、4例の模写本に分類した。今日では、この研究分野では極めて基本的な分類となっている定型本・別本・模写本という分類枠を提言した。

また、定型本を、熊野比丘尼が折り畳んで持ち歩きそれをひろげ、四隅を金具で引っかけて絵解きをしたものと推定し、その痕跡である折れ線（折跡）を全体的な図像の表現形式とともに、定型本の鑑定の重要な目安とした。定型本は、甲・乙・丙の3つの系統、図像の表現形式からⅠ～Ⅸの形式に分類した。甲系統Ⅰ～Ⅳ形式、乙系統Ⅴ～Ⅷ形式、丙系統Ⅸ形式のように、発展形式の推定によりⅠ～Ⅸの形式に分類した。この研究が高い評価を受けたことにより、熊野観心十界曼荼羅の理解が社会的に広まっていた。その結果、それまでほとんど知られていなかった熊野観心十界曼荼羅あるいはその類似例が報告されることとなり、熊野観心十界曼荼羅研究の幅と質が広がった。

また、関係した熊野信仰に関わる那智参詣曼荼羅・熊野縁起絵・熊野系浄土双六などの研究も進展した。こうした新出の諸本の中に新たな分類枠を要する定型本の他、系統が明らかに異なる別本長命寺甲本乙本などがあり、小栗栖（2011）は、こうした熊野観心十界曼荼羅関連研究の集大成として、その名も『熊野観心十界曼荼羅』という書籍を公刊した。この書籍には、多くのカラー図版と共に、新たに所在確認された称名寺本（滋賀県）・宝泉院本（三重県）・秋玄寺本（大阪府）などの定型本10点、盛福寺本・長命寺甲本乙本といった3点の別本、天福寺本・東横田旧十王堂本など2点の模写本が含まれているが、その対照表は宮川（2012）に示してあるので、参照していただきたい。定型本について、小栗栖（2004）以降に確認された新出諸本を加え、従来の分類枠に合わない称名寺本（滋賀県）を甲系統Ⅳ形式とし、甲系統Ⅳ形式としていたものを、順送りに甲系統Ⅴ形式とした。形式の分類番号は、甲系統が展開した後に乙系統の諸本が制作されていったという考え方から、乙系統の形式分類数字は順に1つずつずらし、乙系統については前の分類で乙系統Ⅷ形式であったものを2つに分岐させ乙系統Ⅷ形式・Ⅸ形式に細分化させた。甲系統・乙系統・丙系統、Ⅰ～Ⅸ形式をⅠ～Ⅺとし、甲系統Ⅰ～Ⅴ形式、乙系統Ⅵ～Ⅹ形式、丙系統Ⅺとした。

この小栗栖（2011）の定型本の改訂分類について、宮川（2012）は、小栗栖が分類の基準とした絵画部分の構成要素である分類項目を数値コード化し、統計学の変量解析の1つである階層的クラスター分析の手法により、その改訂分類の適合性を検証した。後に表記する表1にその分類項目と数値コードを示すので、参照のこと。これは小栗栖（2011）が手作業による分類に用いた基本35項目（同書 pp. 178-179）（本論文の表1変数1～35）に、分類上重要な構成要素として追加した「声聞・縁覚の配置」「畜生道の貝の有無」「料紙の紙継ぎ」の3項目（同書 p. 197と p. 199）（本論文の表1の変数36～38）、さらに小栗栖が分類上重視してきた唯一の丙系統Ⅺ形式正覚寺本固有の構成部分「二枳地獄」の有無を変数39、甲系統Ⅰ形式の興善寺本固有の構成要素である「老いの坂の入り口と出口に描かれる鳥居の欠如」を変数40とした。数値コード化したデータについて階層的クラスター分析を適用し、自動的に作図された樹形図（デンドログラム dendrogram）を見たところ、小栗栖の改訂分類とは若干

異なる結果も部分的に見られたが、大筋では小栗栖の改訂分類の適合性を支持する結果であった。小栗栖の改訂分類で乙系統IX形式に分類されていた正念寺本は、乙系統X形式への過渡的な段階のものと見なされ、乙系統X形式に分類することにした。また、丙系統XI形式として分類されている正覚寺本は、甲系統と別の系統というより甲系統の発展系と位置づけることも可能な位置づけになった。

熊野観心十界曼荼羅諸本の分類に階層的クラスター分析を適用する際には、分類に用いる変数について考慮しないといけない事項がある。定型本は、熊野比丘尼が折り畳んで持ち歩き、現存のものは江戸時代初期から中期にかけて制作されたものと推定されることから大凡250～400年の時を経ているために、部分的に剥落破損して、構成部分の一部が判明できなくなっているものもある。手作業の分類は絵画の部分的な剥落破損によるものは不詳として、読み飛ばして分類しているが、コンピュータによる機械的な処理ではそれを分類のための1つの属性として扱ってしまうので、その側面については最新の注意が必要である。階層的クラスター分析の手続きでは、不詳のデータ（欠損値）があるものは、その変数を除いた残りの変数による分析処理を加えて比較検討することにした。

階層的クラスター分析の結果形成された樹形図をいくつかの変数の組み合わせにより検討してみたところ、小栗栖の改訂分類とは若干異なる結果も部分的に見られたが、大筋では小栗栖の改訂分類の適合性を支持する結果であった。小栗栖（2011）が定型本の分類上重要な10項目による階層的クラスター分析の適用では、小栗栖の改訂分類の甲系統II形式とIII形式の区分、及び乙系統IX形式・X形式の区分が、消滅してしまったので、甲系統II形式とIII形式の区分「館（産屋）の欄干」の表1の変数9、乙系統IX形式・X形式の区別の重要な変数「人道に描かれる人数」表1の変数17を加えて12変数による分析としたものが、最小変数による階層的クラスター分析としては、小栗栖（2011）にもっとも適合した樹形図となっていた。

小栗栖の改訂分類で乙系統IX形式に分類されていた正念寺本は、乙系統X形式への過渡的な段階のものと見なされ、乙系統X形式に分類することができた。また、丙系統XI形式として分類されている正覚寺本は、甲系統と別の系統というより甲系統の発展系と位置づけることも可能を見たところ、小栗栖の改訂分類とは若干異なる結果も部分的に見られたが、大筋では小栗栖の改訂分類の適合性を支持する結果であった。小栗栖の改訂分類で乙系統IX形式に分類されていた正念寺本は、乙系統X形式への過渡的な段階のものと見なされ、乙系統X形式に分類された。また、丙系統XI形式として分類されている正覚寺本は、甲系統と別の系統というより甲系統の1つの発展系と位置づけることも可能ではないかということが、樹形図の解釈上新しい分類上の問題として生じた。

宮川（2013）は、この階層的クラスター分析のテクニックを使用して、新出の別本穀屋寺甲本（滋賀県）の分類上の位置づけについての試行を行った。また、宮川（2014）では、別本のサンプルとして穀屋寺甲本・乙本、模写本のサンプルとして天

福寺本（香川県）と六道珍皇寺乙本（京都府）のデータを加えて、定型本全体・別本・模写本の分類の可能性について、階層的クラスター分析の適用を試みた。その結果、定型本丙系統XI形式の正覚寺本は甲系統の最後の分岐（枝）として位置づけられ、別本穀屋寺甲本・乙本とも甲系統・乙系統いずれからも分離した分類となるが、甲系統から分岐したものという位置づけが可能となった。一方、模写本天福寺本は乙系統IX形式・X形式の流れから分岐したものとなり、模写本六道珍皇寺乙本は、さらに乙系統全体の最後に分岐した枝として位置づけられることが変数の組み合わせによる数種の樹形図から読み取れた。

こうした階層的クラスター分析により、特に大きく全体的な図柄の異なる別本（六道珍皇寺甲本・早稲田大学本のような作例）を除き、熊野観心十界曼荼羅の定型本・別本・模写本の分類が可能であると考えられる。

新出熊野観心十界曼荼羅北粕谷区本

2017年11月3日、愛知県知多市で新たに所在確認された熊野観心十界曼荼羅に関する調査に参加した。愛知県知多市北粕谷区が所蔵している。元々は同地区の八所神社の境内にあったが、明治の神仏分離の時に、隣接地にある随応寺の境内に移築された十王堂伝来のものだという。この熊野観心十界曼荼羅の名称は、所有者の名称から北粕谷区本と命名しておく。あるいは伝来から随応寺十王堂本、ないし八所神社十王堂旧蔵本といった名称が考えられる。また、この北粕谷区には、しばしば熊野観心十界曼荼羅と一具で所蔵されている那智参詣曼荼羅が同時に所蔵されており、所蔵地区の説明者によると八所神社の蔵に、大般若経六百巻とともに所蔵されていたものであるという。那智参詣曼荼羅は那智大社青岸渡寺を中心とする社寺参詣曼荼羅である。八所神社は、随応寺境内にある十王堂が明治初期の神仏分離令が出されるまでにあった所であるという。

軸装されている熊野観心十界曼荼羅の収められている箱には、表書きで「萬法唯心之図 三世諸佛之図」と併記されその下に「北粕谷区」と書かれ、箱自体は二幅の掛け軸の箱として作られている。「萬法唯心之図」は熊野観心十界曼荼羅のことを示すと考えられるが、併記されている「三世諸佛之図」に対応する軸は不明。また、その軸は、熊野観心十界曼荼羅より丈が短い。また、箱の裏書きには「昭和十九年三月十二日空襲を受けて箱焼失 全三十年十二月掛図修理箱新調 箱は竹内由興氏の寄付」と墨書されている。「掛図」という記述から、あるいはその昭和三十年に修理軸装されるまでは元々の折り畳んで持ち歩くための表具であったかもしれない。また、絵画の全体的印象から、熊野観心十界曼荼羅の新出の定型本と判断できる。図1として、その本紙部分の画像写真を示す。

一方那智参詣曼荼羅は、箱の表書きに「熊野権現図 紙本 壹幅」とあり、その箱蓋の裏書きには「大正参年拾貳月修理 修理費金参拾円也」とあり、その下には「旭



図1 北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅
紙本着色 140.9×123.8



図2 北粕谷区本那智参詣曼荼羅
紙本着色 142.7×15.5

村大字金沢區長 竹内國太郎 八社神社 社掌 青木伊織」二人の名前が併記されている。北粕谷区本那智参詣曼荼羅として仮称しておくが、これも伝来からは八所神社本那智参詣曼荼羅という名称もあるのかもしれない。図2に、その北粕谷区本那智参詣曼荼羅の本紙部分の画像を示す。縦横の寸法は、これも小栗栖健治氏による計測である。

なお、この2つの絵画史料は平成30年12月に知多市指定文化財に指定されている。

この二幅の絵画史料は、共に保存状態が良く、経年劣化による欠損がほとんどない状態で現存しているところに、これらの熊野信仰関係の史料的価値としても高いものである。愛知県で所在が確認されたものとしては、熊野観心十界曼荼羅は浄観寺本（一宮市）、福聚寺本（岡崎市）に継ぐ3例目。那智参詣曼荼羅は、明星院本（岡崎市）に継ぐ2例目で、2つの絵画史料が同一箇所伝来したものとしては、愛知県では初めての例である。2つの絵画が具有されている例としては、小栗栖（2011）によると他県の8例が知られているので、9例目となる。

北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅の階層的クラスター分析のための属性のコード化

次に宮川（2012, 2013, 2014）で用いた、熊野観心十界曼荼羅の属性項目について、階層的クラスター分析の適用により、この北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅の位置づけを分析してみる。また、定型本としての基本的属性である折れ線は縦3条、横7条の折れ線が、折り跡として残っていると、小栗栖健治氏との原本調査で確認している。また、同じく、本紙の紙継ぎの様式は小栗栖（2011）の「一列」の紙継ぎであると判断できる。小栗栖による紙継ぎの様式は、甲系統Ⅰ～Ⅴ形式、丙系統Ⅺ形式の正覚寺本、乙系統は乙系統Ⅵ形式の3/3貞観寺本（三重県）・浄観寺本（一宮市）・後藤家本（新潟県佐渡）、乙系統Ⅷ形式の2/3宝泉院本（三重県）・安養寺本（岡山県）（山形県の長学院本のみは「階段」状の紙継ぎ）、乙系統Ⅹ形式の1/9の西大寺本（岡山県）のみが「一列」の紙継ぎで、乙系統の主流は「階段」状と呼ばれる袈裟のような縦線が横列とは1つ置きにずれて継がれているものである。これは、持ち歩く用途のための耐久性が考慮された工夫と考えられている。

階層的クラスター分析では、宮川（2014）で用いた、定型本41例、別本・模写本各2例の計45点の熊野観心十界曼荼羅の基本データセットに、この北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅のデータを数値コード化して追加して分析した。したがって、サンプル数は46例、変数は44変数で、各変数の割り当てとコードは宮川（2014）と同一である。

定型諸本は、1点1点手書きで江戸初期から中期に渡り、限られた工房で製作されていたもので、その製作技法については、諸本の表現様式の差異が研究されてきた。小栗栖（2011）が用いた熊野観心十界曼荼羅の分析手法は、諸本の綿密な原本調

査と画像データの細部にわたる手作業の比較分析である。海外に流出しているために詳細な構成要素のデータを欠いている Susanne Formanek 本を除いた定型諸本35項目の構成要素についての基礎データを、表にまとめている（同書 pp. 159-160）。その35項目で、項目を変数として表記するが、通し番号は小栗栖（2011）と同一である。これらの質的なデータをそれぞれの項目について、分類カテゴリーを表1に提示している。

これらの変数の詳細な説明は、小栗栖（2011）に詳しく説明されている。変数1「杉の木の形式」老いの坂の頂上部分にある杉の木の描き方のパターンである。変数2の「黒雲に乗る獄卒の有無」は、定型本甲系統Ⅰ・Ⅱ形式には描かれないが、甲系統Ⅲ以降に老いの坂左上に描かれる図像である。また、その獄卒が掠っていく亡者のどの部分を掴んでいるかが、変数3である。ちなみに、この北粕谷区本にはその図像は描かれない。変数4「阿弥陀如来の印相」は、中央の老いの坂のすぐ下に描かれる仏界（来迎の阿弥陀）の中央に描かれる阿弥陀如来の印相を指す。定型本の大半が、中品上生（両手を胸の所に置き掌を見せている説法印が中品、両手の人差し指と親指を輪のように付けているのが上生とする説による）の印相である。模写本の2例も同様。定型本では、平楽寺本が阿弥陀の画像としては合掌で特異であり、武久家本のみ下品上生（阿弥陀如来の中品上生の左手を下に向けて下げている）。別本の長命寺穀屋寺甲本・乙本は、上品上生（阿弥陀如来座像の定印で、親指と人差し指で輪を作り、両手を腹の所で重ねている）である。変数5「声聞と縁覚の桜の場所」、縁覚の背後に桜の木が描かれるが、甲系統は老いの坂の下、向かって左側に描かれるのが甲系統、向かって右側に描かれるのが乙系統、丙系統も右である。北粕谷区本は、左に描かれる。変数6「線が示す菩薩の場所」は、北粕谷区本で観音と勢至の両方に中央の心字から線が引かれている。変数7「館の山の有無」は、北粕谷区本は有である。変数8「館の屋根」は入母屋造りの広い部分であるか、切妻造りの狭い部分であるかで、北粕谷区本では狭い。変数9「館の欄干」つまり出入口が描かれるかだが、北粕谷区本はすやり霞で隠されている。変数10「赤子の状態」（産湯の場面の赤子の位置）については、北粕谷区本は赤児を抱く姿として描かれる。

変数11「老いの坂に描かれる人数」は25人。変数12老いの坂の頂上に描かれる「貴族風の男性の顔の向き」は右、変数13老いの坂の頂上に描かれる「老いの坂を振り返る女性」は振り向かない。変数14「仏供と三具足の位置」は中央の施餓鬼壇に描かれる三具足と仏供との位置関係。変数15「施餓鬼供養の少年の有無」は、施餓鬼壇の手前の供養僧の中央に、施主の少年（目蓮尊者）が描かれているかどうかで、これは少年が描かれている。変数16「釈迦如来の印相」施餓鬼の供養僧の右側に、盂蘭盆会経を目蓮尊者に授ける釈迦が描かれるがその印相で、甲系統Ⅰ形式のみ施無畏・与願印（右手を上へ上げ、左を下に向けて下げる）で、他の定型本は説法印（両手を胸の所で上に上げる）であり、北粕谷区本はこの説法印。変数17「人道の人数」は施餓鬼壇の右斜め上の鳥居のところに描かれる人数で、これは3人。変数18「剣

表1 分析に使用した属性項目(変数)と数値化のための変換コード

変数 番号	項目	変換コード	北粕谷区本
1	杉の木の形式	形式1=1 形式2=2 形式3=3 形式4=4 無=0	2
2	黒雲に乗る獄卒の有無	無=0 有=1	0
3	黒雲の獄卒が亡者をつかむ場所	黒雲の獄卒無=0 腕=1 髪=2 足=3	0
4	阿弥陀如来の印相	中品上生=1 合掌=2 下品上生=3 上品上生=4* 不詳=0	1
5	声聞と縁覚の桜の場所	左=0 右=1	0
6	線が示す菩薩の場所	観音勢至=1 天女=2 観音=3*	1
7	館の山の有無	無=0 有=1	1
8	館の屋根	広い=1 狭い=0	0
9	館の欄干	階段=1 すやり霞=2 出入り口なし=3 出入り口あり=4 欄干なし=0*	2
10	(館の) 赤子の状態	抱く=1 盥の中=2 盥に入れるところ=3	1
11	老いの坂に描かれる人数	22=22 23=23 24=24 25=25 27=27 20=20*	25
12	貴族風の男性の顔の向き	左=1 右=2 不詳=0	2
13	老いの坂を振り返る女性	振り向かない=1 右=2 左=3 不詳=0	1
14	仏供と三具足の位置	間=1 前=2	2
15	施餓鬼供養の少年の有無	無=0 有=1	1
16	釈迦如来の印相	施無畏・予願印=1 説法=2 不詳=0	2
17	人道の人数	3=3 5=5	3
18	剣の山の獄卒の採り物	鉾=1 梶棒=2 鎌=3	1
19	剣の山の獄卒の衣装	褌=1 鎧=2 虎皮の腰巻き=3	1
20	閻魔王の有無	無=0 有=1	0
21	閻魔王の顔の向き	正面=1 右=2 無=0	0
22	不産女地獄の形状	平面=1 台状=2	2
23	不産女地獄の場所	左上=1 右下=2 左中=3*	1
24	賽の河原の地藏菩薩の乗物	蓮弁=1 蓮台=2	1
24	地獄の鳥居と賽の河原の境	山状=1 雲=2 なし=0*	1
26	三途の川に架かる橋の形	平橋=1 反り橋=2	1
27	火柱の男性の向き	無=0 背中=1 胸=2	1
28	火車に乗る人数	0=0 1=1 2=2 3=3	2
29	串刺しにされる人数	1=1 2=2	1
30	串刺しの方向	a口=1 b腹=2 a+b=3*	1
31	畜生道の人面	獣面=1 人面=2	2
32	両婦地獄の男性の顔の向き	横倒し=0 正面=1 左=2	1
33	子は三界の首枷の場所	無=0 左上=1 右下=2	0
34	太鼓を叩く獄卒の衣装	無=0 褌=1 上衣・褌=2 鎧=3	2
35	鉄室の棟の方向	/=1 \=2 なし=0*	2
36	声聞・縁覚の配置	縁覚左・声聞右=1 縁覚右・声聞左=2	1
37	畜生道の貝の有無	無=0 有=1	1
38	料紙の紙継ぎ	一列=1 階段=2	1
39	二升地獄の有無	無=0 有=1	0
40	老いの坂の鳥居の有無	無=0 有=1	1
41	日輪・月輪の色彩	金銀=1 赤白=2 その他=3	1
42	本紙の折り筋	無=0 有=1	1
43	産屋の浄衣	女性のみ=1 男性のみ=2 男女とも浄衣=3	1
44	全体的な色彩の濃淡	濃彩=1 淡彩=2	1

- 注 1) 変数1~35: 小栗栖(2011) pp. 178-179の表5の特色(項目)番号による。
 2) 変数36~38: 小栗栖(2011) p.197の表8の特色8~10による。
 3) 変数39・40: 筆者追加。変数39の二升地獄は正覚寺本のみ描写あり。
 変数40の老いの坂で出口・入り口の鳥居について興善寺本のみ描写がなく、他の定型本には描写あり。
 4) *は、別本長命寺穀屋寺本のために追加した固有のカテゴリー。
 5) 変数3の「黒雲の獄卒が亡者をつかむ場所」の亡者は定型本では男性であるが、模写本天福寺本のみ女性。
 6) 変数4の阿弥陀如来の印相(九品)分類は2説あるが、小栗栖(2011)に従い両手の位置が胸のところで上向き(説法印)が中品、親指と人差し指で輪を作るのが上生とした。右手が上向きの施無畏・左手が下に向く与願印を下品、両手を腹で重ねる定印を上品とした。
 7) 変数41~44は、定型本と模写本との典型的な相違点と考えられる変数。
 8) 変数41について、称名寺本は見かけ上日輪・月輪は赤白の色彩をされているが後補のもので、元の色彩は金銀と鑑定できたので金銀としてコード化。
 9) 変数43について、貞観寺本のみ男女とも色衣で産屋の女性の赤横縞の衣は後補の可能性もあるが、未確定なので男女とも色衣でコード化薬師庵本は不詳とした。

の山の獄卒の採り物」は、甲系統、乙系統Ⅹ形式、乙系統Ⅸ形式のうち正念寺本のみ、丙系統は獄卒が鉾を持っているが、乙系統Ⅵ～Ⅸ形式（正念寺本を除く）は棍棒を持っている。変数19「剣の山の獄卒の衣装で、禪・鎧・虎皮のパターンがあるが、甲系統は禪、乙系統は禪・鎧・虎皮と多様、丙系統は虎皮で、北粕谷区本は禪。

変数20「閻魔王の有無」、変数21「閻魔王の顔の向き」だが、甲系統Ⅰ～Ⅲ形式までは閻魔王は描かれず、甲系統Ⅳ形式の称名寺本以降は絵の左側剣の山の右側に描かれていく。北粕谷区本は、閻魔王は描かれていない。変数22「不産女地獄の形状」は、施餓鬼壇の左斜め下に竹林とともに描かれる不産（石女）地獄の地面部分で、甲系統Ⅰ・Ⅱ形式は平面で、北粕谷区本は甲系統Ⅲ形式の西来院本と同じく台状に描かれている。変数23「不産女地獄の場所」は、甲系統Ⅰ・Ⅱは左上に描かれるが、北粕谷区本もそのパターンで描かれている。丙系統も同じ。甲系統Ⅲ形式西来院本は台状で左上、甲系統Ⅳ・Ⅴ形式は台状で右下に移動する。乙系統は両パターンが混在する。変数24「賽の河原の地藏菩薩の乗物」は連弁と蓮台があるが、甲系統と丙系統は連弁。乙系統は乙系統Ⅷ形式のみ連弁、他は蓮台で描かれている。北粕谷区本は、連弁で描かれる。変数25「地獄の鳥居と賽の河原の境」は山状と雲があり、甲系統丙系統は山状、乙系統は雲とはっきり分かれている。北粕谷区本は山状で描かれる。変数26「三途の川に架かる橋の形」奈河橋と呼ばれる橋は、甲系統は基本的に平橋だが、甲系統Ⅳ形式の称名寺本のみ反り橋で描かれる。乙系統は、乙系統Ⅵ形式に分類されるものは平橋だが、他は反り橋で描かれる。丙系統も反り橋である。北粕谷区本は、平橋である。変数27「火柱の男性の向き」、火柱の男性は甲系統Ⅰ・Ⅱと丙系統では描かれず、甲系統Ⅲ～Ⅴ形式はそれが描かれ、背中で火柱に縛られている。乙系統は乙系統Ⅶ形式の安養寺本を除き、胸のところで火柱に縛られている。北粕谷区本は、火柱の男性が描かれ、背中で火柱に縛り付けられている。変数28「火車に乗る人数」で、0～3人までであるが、北粕谷区本は2人描かれる。2人のパターンは、甲系統Ⅱ形式の平楽寺本、甲系統Ⅲ形式の西来院本とⅣ形式の称名寺本のみである。変数29「串刺しにされる人数」は甲系統と丙系統は1人、乙系統は1人と2人の両パターンがある。北粕谷区本は、1人である。

変数30「串刺しの方向」は口から刺されるものとそれ以外の腹あるいは尻から刺されるものがある。甲系統と丙系統、乙系統Ⅵ形式は、口からのパターンで、乙系統Ⅶ～Ⅹ形式はそれ以外のパターンである。北粕谷区本は、口から刺されるパターンである。変数31「畜生道の人面」は、獣面と人面があるが、定型本では甲系統Ⅰ形式の興善寺本のみ獣面で、他は人面である。変数32「両婦地獄の男性の顔の向き」、甲系統Ⅰ形式の興善寺本のみ、二匹の蛇に巻き付かれた男性が引き倒された状態であるが、甲系統Ⅰ形式の日本民芸館本から甲系統Ⅱ～Ⅴ形式、乙系統Ⅵ形式、丙系統が正面、乙系統Ⅶ～Ⅹ形式が左向きとなっている。北粕谷区本は正面を向いている。変数33「子は三界の首枷」は、甲系統Ⅰ～Ⅳ形式までは描かれていないが、甲系統Ⅴ形式は左上閻魔王の右、乙系統と丙系統は右下の畜生道の鳥居の右に描かれる。北粕谷区

本では、この図像は描かれていない。変数34「太鼓を叩く獄卒の衣装」、産屋の下修羅道の鳥居の右脇で太鼓を叩く獄卒は、甲系統Ⅰ形式の興善寺本と甲系統Ⅱ形式の平楽寺本のみは描かれていない。甲系統Ⅰ形式の日本民芸館本は禪、甲系統Ⅱ形式の紀三井寺穀屋寺本と甲系統Ⅲ～Ⅴ形式は上衣と禪、乙系統Ⅵ形式の後藤家本と浄観寺本のみは鎧、乙系統Ⅵ形式の貞観寺本から乙系統Ⅶ～Ⅹ形式と丙系統は禪である。北粕谷区本は上衣禪である。変数35「鉄室の棟の方向」は、甲系統Ⅰ形式の興善寺本のみ／（右上がり）、甲系統Ⅰ形式の日本民芸館本から甲系統Ⅱ～Ⅴ形式までは＼（右下がり）であり、乙系統Ⅵ～Ⅹ形式まで乙系統Ⅹ形式の大円寺本を除き／（右上がり）である。北粕谷区本は＼である。

これらの質的な分析データを、表1のような数値コードに置き換えて、数値データ化した。使用した分析項目（変数）は、定型諸本の基礎的な構成要素35項目に、小栗栖が重要な項目として付け加えている「声聞・縁覚の配置」変数36・「畜生道の貝の有無」変数37、「料紙の紙継ぎ」の様式変数38の3項目を追加し、38項目のデータセットを作成した。さらに、小栗栖が論じている丙系統Ⅺ形式の正覚寺本のみ固有の特徴である「二升地獄」の有無（無＝0、有＝1）を変数39、興善寺本固有の特徴の1つである「老いの坂の入り口と出口に描かれる鳥居の欠如」を分析において1項目として加えてみることにし（無＝0、有＝1）、変数40として追加した。

小栗栖による質的分析の各項目を数値データとして変換する際、保存状態によって、部分的な剥落が生じたり、後補による書き換えが生じているものがあり、その部分の直接的な判定分類が困難なものを「不詳」としている。こうした場合、本来なら欠損値のあるサンプルデータとして扱い、結果的に最終的な分析対象からそのサンプル（例）を外してしまうことが多い。しかし、年代の経た民俗文化財であるので、こうした条件が生じてくるのは当たり前であり、単純な欠損値として処理すると、分類上貴重な諸本の一部を落としてしまう可能性が強いので、不詳は当該項目については0としてコード化した。ただし、変数6の「線が示す菩薩の場所」については、小栗栖（2011）では、西大寺本が宝暦10年（1760年）の補修の際、心字からの伸びる線を引き直しているために不詳としている上、そもそも線のない分析番号41の正覚寺本があるので、「無＝0」と区別して「不詳＝1」としてコード化した。これらのデータ欠損については、最終的なデータの解釈の際に考慮するものとした。

宮川（2012, 2013）による階層的クラスタの分析で使用した40項目に、宮川（2014）では特に模写本と定型本との差異を表す項目として、①変数41「日輪・月輪の色彩」定型本と別本の長命寺穀屋寺甲本別本は金銀で、模写本は赤白で日月が彩色、②変数42「本紙の折り筋の有無」、③変数43「産屋の浄衣」、④変数44「彩色の濃淡」の4変数を加えた。

これらの44変数の概要と北粕谷区本のコード化した数値データを表1に示す。

なお、この分析では別本として穀屋寺甲本・乙本、模写本として天福寺本と六道珍皇寺乙本の各2例を分類のための対照サンプルとして残してある。

階層的クラスター分析による熊野観心十界曼荼羅諸本と北粕谷区本の位置づけ

パソコン用の SPSS（社会科学用統計パッケージ）Ver.20 の多変量解析プログラムのオプション、「分析」「分類」「階層クラスタ」に含まれる階層的クラスター分析（hierarchical cluster analysis）の手法により、樹形図を描く手法が分析モデル的に適合すると考えた。その手法で各定型諸本の属性の差異に基づき、視覚的な樹形図の表記として、視覚的に表記することができる多変量解析の統計手法である。統計量のオプションとしては、「クラスタ凝集経過行程」、「クラスタ化の方法」に「グループ間平均連結法」、「測定方法」に「平方ユークリッド距離」をオプションとして指定した。

まず、宮川（2014）で構成した41例の定型本、別本穀屋寺甲本・乙本、模写本として天福寺本と六道珍皇寺乙本の各2例に、新出の北粕谷区本を加えた46例（サンプル）に関する上述の全44変数に階層的クラスター分析を適用して作図した樹形図を、図3に示す。

今回の分析で新出の北粕谷区本を追加してサンプル数が46になったことを除けば、当然ながら樹形図は、基本的に宮川（2014）の樹形図の形状と差異はなく、大きく3つのクラスターに分かれている。最上部にある別本長命寺穀屋寺甲本乙本の小さなクラスターがある。次の大きなクラスターは、定型本甲系統のクラスターである。甲系統の枝の分岐で小栗栖（2011）の分類では、甲系統Ⅰ形式に分類された興善寺本と日本民芸館本は、1つの原型として分類としても扱えるが、それぞれ類似性は高いが独立したものとしても扱うことができよう。甲系統Ⅱ形式に分類されていた平楽寺本と紀三井寺本が連続しているが、別の分岐になっている。また甲系統Ⅴ形式の1つに分類されていた大楽寺本と観音寺本が、他の龍洞寺本・若林家本・正法寺本・個人蔵本・薬師庵本と分岐していることが、小栗栖（2011）の分類と異なっていたが、これは宮川（2012・2013・2014）とは変更がない。今回の分析の主対象である北粕谷区本は、この甲系統Ⅲ形式の西来院本と同じ小クラスターに位置づけられている。したがって、まず北粕谷区本は、分類上はまず甲系統、さらに細かな分類としてはⅢ形式に分類できる可能性を示している。

なお、この甲系統の最後に、丙系統の正覚寺本が繋がっている。これは、不自然なこと位置づけではない。正覚寺本は甲系統の系統から、最後に分岐した定型本と考えとらえ方が成立するということは、宮川（2012）でも論じてきたことである。

この甲系統のクラスターの次にある、もう一つの大きなクラスターが、定型本乙系統のクラスターである。定型本乙系統の大きなクラスターは、さらに2つのクラスターに分岐している。1つは、乙系統Ⅵ形式の後藤家本・浄観寺本、乙系統Ⅶ形式の浄土寺本・西福寺本・阿弥陀寺本のクラスター、乙系統Ⅵ形式の貞観寺本が乙系統Ⅵ形式・Ⅶ形式から連なっていることが、小栗栖（2011）からは若干異なるが、これは小さな差異である。次に乙系統のもう1つの大きなクラスターの分岐は、乙系統Ⅷ形

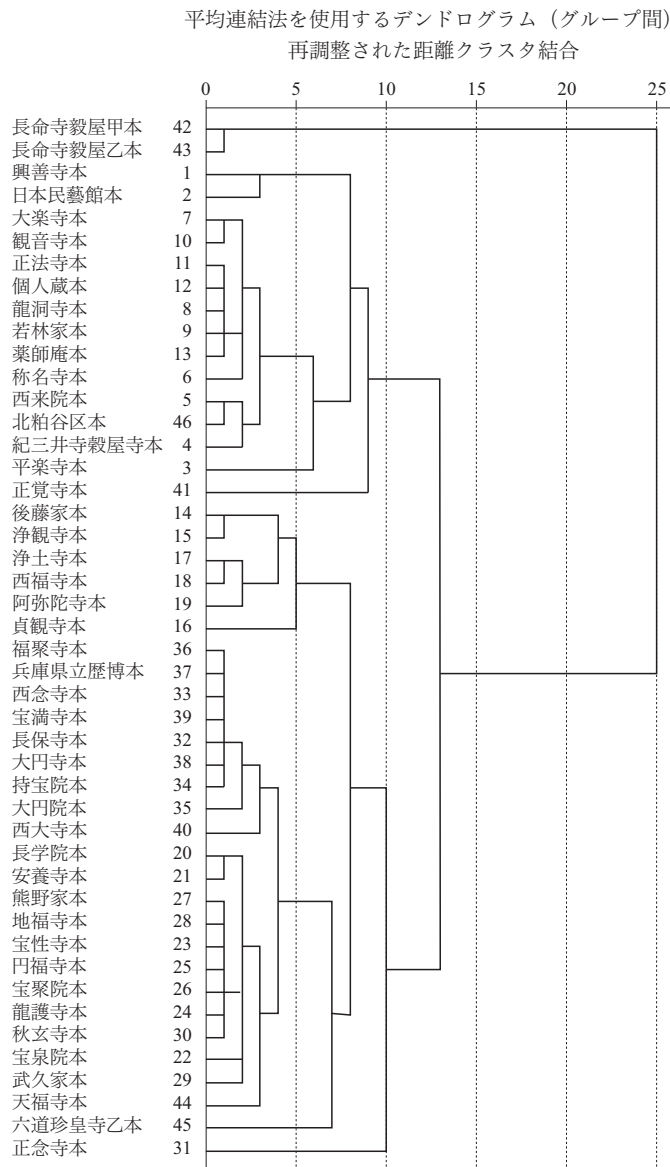


図3 全44変数の階層的クラスター分析の階層的クラスター分析による樹形図

式・IX形式・X形式のクラスターである。この中に模写本の天福寺本ともう1例の模写本の六道珍皇寺本が含まれているが、これもこれらの別本が、乙系統Ⅷ・IX・X形式の定型本から模写されたと考えると合理的な結果である。ただし、小栗栖 (2011) の分類では乙系統IX形式に分類されていた正念寺本が、これらの模写本より定型本乙系統から離れたものとなっている点は不自然な分析結果かもしれない。ただし、この正念寺本は、定型本の中でも剥落や破損により不詳部分が特に多い定型本の例であるので、この特異性は不詳部分が少なくないという特徴から解釈できることは宮川 (2014) でも論じたところである。

そこで、これも宮川（2012, 2014）の分析で行ったように、不詳データが含まれている変数を除去した37変数による分析が適切であると考えられる。その結果を図4に示す。この分析において、不詳（コード0という数値を入れデータ入力したが、実質的な欠損）のある変数は、変数1「杉の木の形式」・変数4「阿弥陀如来の印相」・変数6「線が示す菩薩の場所」・変数12「貴族風の男性の顔の向き」・変数13「老いの坂を振り返る女性」・変数16「釈迦如来の印相」・変数43「産屋の浄衣」である。

この分析においても、別本長命寺穀屋寺甲本乙本、甲系統の諸本・丙系統の正覚寺本のクラスターの分岐はほとんど変化がない。平楽寺本と紀三井寺穀屋寺本との分岐、北粕谷区本が甲系統Ⅲ形式の西来院本と同じ分岐に分類されることにも変化がない。したがって、本研究の関心事項である北粕谷区本は、この分析では甲系統Ⅲ形式に分類されると判断される。一方、乙系統については、より小栗栖（2011）の分類に近いものとなっている。小栗栖（2011）の分類では、乙系統Ⅸ形式に分類されていた正念寺本は、乙系統Ⅸ形式というより、そこからⅩ形式に連なる位置づけになっている。小栗栖の分類ではⅩ形式に分類されていた大門院本は、この正念寺本とⅩ形式の諸本との中間的位置に連なっている。正念寺本は完全に甲系統Ⅸ形式の属性と一致しているのではないので、あるいは、この中間的位置づけが正しいのかもしれない。ただし、全体としては1例のみで1つの分類カテゴリーを構成するものが、定型本だけで甲系統で5、乙系統で5、合計10カテゴリーで、始めから1例しか知られていない丙系統を別のものとしても1、定型本だけで11カテゴリーとなり、これらは階層的クラス分析ではモデルの不適合または不完全な分析の結果により起きている可能性を否定できない。図4および表2「37変数での階層的クラスター分析」参照。

また、模写本天福寺本は乙系統Ⅶ～Ⅹ形式に連なり、模写本六道珍皇寺乙本はⅥ～Ⅹ形式の乙本全体から連なった位置づけになっている。

そこで、宮川（2012）が見つけた基本的な12変数による階層的クラスター分析を適用した。小栗栖（2011）が最も基本的な分類基準項目と呼んだ10変数（表1の変数3・6・21・23・24・26・33・36・37・38）のみでは小栗栖の改訂分類枠に合致したクラスターが分離できないということから、定型本乙系統Ⅸ形式とⅩ形式の差異を示す変数17（人道の人数）、甲系統Ⅰ形式と他の甲系統を区別する変数9（館すなわち産屋の欄干）の2変数を加えた合計12変数による分析が、小栗栖の改訂分類に近いものである。また、宮川（2014）と同じく、模写本が含まれている関係で、これに定型本と模写本の区別をする変数41・42・44を加えた15変数が最小の変数による分類として最適と考えた。この15変数による階層的クラスター分析の樹形図を図5に示す。

定型本甲系統諸本は、小栗栖の分類と同一の5つの分類区分と諸本の位置が落ち着いたものとなると同時に、本研究の主たる関心事項である北粕谷区本は、平楽寺本・紀三井寺穀屋寺本と同じ、甲系統Ⅱ形式の区分に位置づけられている。これは先の37変数による分類が西来院本と同じ甲系統Ⅲ形式に分類されていたものと、結果が

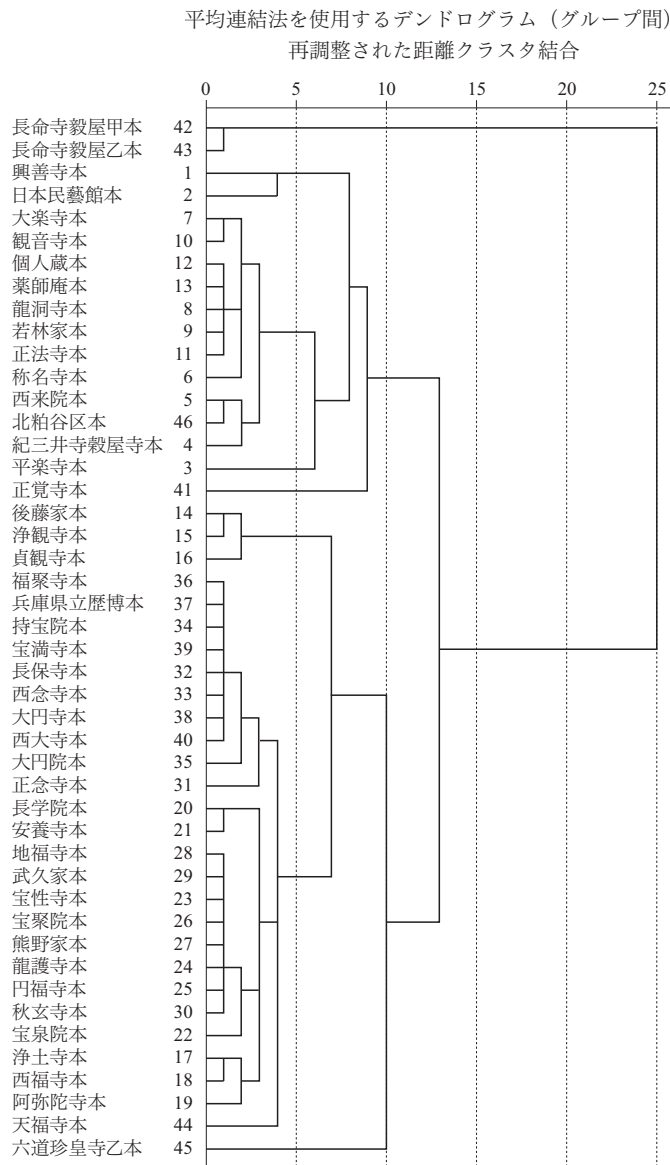


図4 37変数(不詳データ変数1・4・6・12・13・16・43除去)の階層的クラスター分析による樹形図

異なる点に注意する必要がある。この2つの異なる結果は、この北粕谷区本が甲系統Ⅱ形式とⅢ形式の過渡的的属性を有している可能性があることを示唆している。甲系統Ⅱ形式とⅢ形式の分類上の差異として、変数2の「黒雲に乗る獄卒の有無」が重要だが、北粕谷区本はⅡ形式と同じくそれが描かれていない。変数22の「不産女地獄の形状」について北粕谷区本は台状であり、これはⅢ形式の特徴である。ただし、ここでは37変数による分析が甲系統の諸本については鎖効果と呼ばれる不完全なクラスター化の疑いが残っていることを否めないことから、15変数による分析結果を採り、

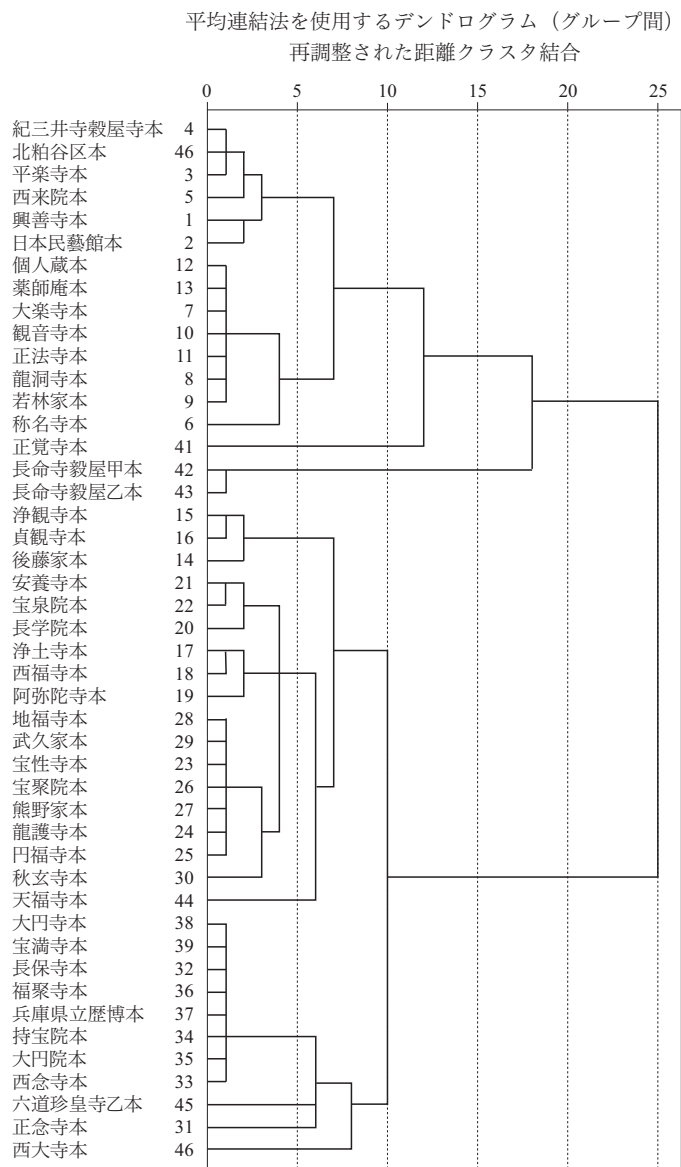


図5 15変数（変数3・6・9・17・21・23・24・26・33・36・37・38・41・42・44で構成）
階層的クラスター分析による樹形図

北粕谷区本を甲系統Ⅱ形式のものとして分類しておく。また、宮川（2013, 2014）でも論じたように、乙系統の正覚寺本はこの甲系統の大きなクラスターの末尾の分岐に位置づけられるが、これは正覚寺本の持っている属性からは不自然な位置づけとはいえない。また、宮川（2013, 2014）で検討したように、別本長命寺穀屋寺甲本・乙本が、その正覚寺本を含む甲系統丙系統の大きなクラスターから、分岐した位置づけとなっているが、これも別本長命寺穀屋寺甲本の持っている特徴からは、決して不自然な位置づけとはいえない。

表2 階層的クラスタ分析による熊野観心十界曼荼羅の分類

小栗晒 (2011) による形式分類による				37変数での階層的クラスタ分析による分類				15変数での階層的クラスタ分析による分類			
分析番号	名称	系統	形式	分析番号	名称	系統	形式	分析番号	名称	系統	形式
1	興善寺本 (滋賀県)	甲	I	1	興善寺本 (滋賀県)	甲	I a	1	興善寺本 (滋賀県)	甲	I
2	日本民藝館本 (東京都)		II	2	日本民藝館本 (東京都)		I b	2	日本民藝館本 (東京都)		II
3	平楽寺本 (三重県)			3	平楽寺本 (三重県)		II a	3	平楽寺本 (三重県)		
4	紀三井寺観音寺本 (和歌山県)		III	4	紀三井寺観音寺本 (和歌山県)		II b	4	紀三井寺観音寺本 (和歌山県)		III
5	西来院本 (秋田県)		IV	5	西来院本 (秋田県)		III	46	北稻谷区本 (愛知県)		
6	称名寺本 (滋賀県)		V	6	称名寺本 (滋賀県)		IV	5	西来院本 (秋田県)		IV
7	大栗寺本 (富山県)		VI	7	大栗寺本 (富山県)		Va	6	称名寺本 (滋賀県)		V
8	龍洞寺本 (岐阜県)			8	龍洞寺本 (岐阜県)		Vb	7	大栗寺本 (富山県)		
9	観音寺本 (三重県)		VII	9	観音寺本 (三重県)			10	観音寺本 (三重県)		VII a
10	龍洞寺本 (三重県)			10	龍洞寺本 (岐阜県)		Vb	8	龍洞寺本 (岐阜県)		
11	正法寺本 (三重県)	乙	VIII	11	正法寺本 (三重県)			9	若林家本 (三重県)		VII b
12	個人蔵本 (非公開)			12	正法寺本 (三重県)		VIII	10	観音寺本 (三重県)		
13	薬師庵本 (香川県)		IX	13	個人蔵本 (非公開)			11	正法寺本 (三重県)		VIII a
14	後藤家本 (新潟県)			14	後藤家本 (香川県)		IX a	12	個人蔵本 (非公開)		
15	浄観寺本 (愛知県)		X	15	浄観寺本 (愛知県)			13	薬師庵本 (香川県)		IX b
16	貞観寺本 (三重県)			16	貞観寺本 (愛知県)		IX b	14	正覚寺本 (和歌山県)		X
17	浄土寺本 (京都府)	丙	XI	17	浄土寺本 (三重県)			15	浄観寺本 (愛知県)	乙	XI a
18	阿弥陀寺本 (香川県)			18	西福寺本 (京都府)		XI a	16	貞観寺本 (愛知県)		
19	長学院本 (岡山県)		IX	19	阿弥陀寺本 (香川県)			17	浄土寺本 (三重県)		VII a
20	安養寺本 (三重県)			20	長学院本 (岡山県)		VIII	18	西福寺本 (京都府)		
21	宝泉院本 (三重県)		IX	21	安養寺本 (岡山県)		IX a	19	阿弥陀寺本 (香川県)		VII b
22	宝性寺本 (秋田県)			22	宝泉院本 (三重県)		IX b	20	長学院本 (岡山県)		
23	龍護寺本 (三重県)	丁	X	23	宝性寺本 (秋田県)			21	安養寺本 (岡山県)	丙	VIII a
24	宝泉院本 (三重県)			24	龍護寺本 (三重県)		IX b	22	宝泉院本 (三重県)		
25	宝泉院本 (三重県)		IX	25	宝性寺本 (秋田県)		IX b	23	宝性寺本 (秋田県)		IX a
26	地福寺本 (大阪府)			26	龍護寺本 (三重県)		IX b	24	龍護寺本 (三重県)		IX b
27	武久家本 (岡山県)		X	27	宝泉院本 (千葉県)		IX b	25	龍護寺本 (三重県)		
28	秋玄寺本 (奈良県)			28	地福寺本 (大阪府)		IX b	26	宝泉院本 (千葉県)		IX a
29	正念寺本 (三重県)	戊	XI	29	武久家本 (岡山県)		IX b	27	龍護寺本 (三重県)		IX b
30	長保寺本 (岐阜県)			30	秋玄寺本 (奈良県)		IX b	28	地福寺本 (大阪府)		
31	持宝院本 (兵庫県)		X	31	正念寺本 (三重県)		IX b	29	武久家本 (岡山県)		IX a
32	大円院本 (兵庫県)			32	長保寺本 (岐阜県)		IX b	30	秋玄寺本 (奈良県)		IX b
33	持宝院本 (兵庫県)	己	XI	33	西念寺本 (三重県)		IX b	31	正念寺本 (三重県)		X a
34	福聚寺本 (愛知県)			34	持宝院本 (兵庫県)		IX b	32	長保寺本 (岐阜県)		X b
35	大円院本 (兵庫県)		X	35	大円院本 (山形県)		IX b	33	西念寺本 (三重県)		
36	福聚寺本 (愛知県)			36	長保寺本 (岐阜県)		IX b	34	持宝院本 (兵庫県)		X b
37	兵庫県立歴史博物館本 (兵庫県)		XI	37	福聚寺本 (愛知県)		IX b	35	大円院本 (山形県)		X
38	大円寺本 (三重県)			38	兵庫県立歴史博物館本 (兵庫県)		IX b	36	福聚寺本 (愛知県)		
39	宝満寺本 (滋賀県)	庚	XI	39	大円寺本 (三重県)		IX b	37	兵庫県立歴史博物館本 (兵庫県)		X c
40	Susanne Formanek 本 (オーストリア)			40	宝満寺本 (滋賀県)		IX b	38	大円寺本 (三重県)		
41	正覚寺本 (和歌山県)		XI	41	西大寺本 (岡山県)		IX b	39	宝満寺本 (滋賀県)		X c
42	長命寺観音寺本 (滋賀県)			42	長命寺観音寺本 (滋賀県)		IX b	40	西大寺本 (岡山県)		
43	長命寺観音寺乙本 (滋賀県)	別本	XI	43	長命寺観音寺乙本 (滋賀県)		IX b	41	正覚寺本 (和歌山県)	別本	X c
44	天福寺本 (香川県)			44	天福寺本 (香川県)		IX b	42	長命寺観音寺甲本 (滋賀県)		
45	六道珍皇寺乙本 (京都府)		XI	45	六道珍皇寺乙本 (京都府)		IX b	43	長命寺観音寺乙本 (滋賀県)		
								44	天福寺本 (香川県)		X c
			XI				IX b	45	六道珍皇寺乙本 (京都府)		

(注) 詳細なデーターを欠如している Susanne Formanek 本 (オーストリア) については、階層クラスタ分析の対象から外したので、分析番号なしとした。

一方、乙系統については、甲系統がⅠ～Ⅴ形式にまとまり、それぞれの形式内の分岐した枝が、それぞれ1つにまとめられたのに対し、乙系統Ⅵ～Ⅹ形式についてはⅥ～Ⅹ形式それぞれが2ないし3の小枝に分岐していたことは解消していない。これらの違いを比較するために、分類の対照表としてまとめたものが、表2である。小栗栖(2011)の分類表も参照のために示してある。

定型本について階層的クラスター分析を適用して部分修正を行った分類の分析結果と、大きくは変化がないが、表記上の記号として、例えば甲系統Ⅰ形式の下位分類として、宮川(2012)の定型本階層的クラスター分析では乙系統ⅥA・ⅥB形式のようなアルファベットの太文字表記を使用したが、その中の微細の差異を示しているに過ぎないと解釈できるので、イメージとして表記上アルファベットの細文字表記に変更した。また、各分類の過渡的な例について、小栗の分類・順序性を尊重し表記とした。例えば、乙系統Ⅵ形式の後藤家本(Ⅵa形式)と浄観寺本・貞観寺本(Ⅵb形式)は、大きくは小栗栖のⅥ形式とし、その中の下位分類としてⅥa・Ⅵbも併記する。Ⅶ形式も同様で、その中の下位分類としてⅦa形式浄土寺本・西福寺本、Ⅶb形式阿弥陀寺本を併記、Ⅷ形式も同じく、Ⅷa形式に長学院本、Ⅷb形式に安養寺本・宝泉院本を併記する。Ⅸ形式ではⅨaに宝性寺本・龍護寺本・円福寺本・宝聚院本・熊野家本・地福寺本・武久家本、Ⅸbに秋玄寺本が位置づけられる。さらに、この乙系統Ⅷ形式・Ⅸ形式に模写本である天福寺本が連なっている。天福寺本は、Ⅷ形式ないしⅨ形式の定型本を模写したものと考えると理解しやすいだろう。小栗栖の分類では、Ⅸ形式に分類された正念寺本は、Ⅸ形式とⅩ形式の過渡期的位置に位置づけられているが、クラスターとしてはⅩ形式のクラスターに近い位置づけになっている。したがって、これはⅨc形式というより、Ⅹa形式として位置づけることにする。また、模写本六道珍皇寺乙本が、この正念寺に並ぶ位置に分類されている。小栗栖の分類ではⅩ形式に位置づけられた諸本の大半、長保寺本・西念寺本・持宝院本・大円院本・福聚寺本・兵庫県立歴史博物館本・大円寺本・宝満寺本はⅩb形式として1つのクラスターにまとめられている。本来このⅩ形式に分類されていた西大寺本はこのⅩb形式に連なる別の分岐になっているので、Ⅹc形式のものとして分類することとした。小栗栖の分類ではⅩ形式に位置づけられた諸本の大半、長保寺本・西念寺本・持宝院本・大円院本・福聚寺本・兵庫県立歴史博物館本・大円寺本・宝満寺本はⅩb形式として1つのクラスターにまとめられている。本来このⅩ形式に分類されていた西大寺本はこのⅩb形式に連なる別の分岐になっているので、樹形図の読み方として宮川(2012)ではこの西大寺本をⅩA(本論文の表記ではⅩaのような表記)とし、正念寺本をⅩB(本論文ではⅩbのような表記)としたが、正念寺本をⅩa、西大寺本をⅩc形式、他のⅩ形式の8例をⅩb形式として分類表記を変更した。これは、37変数による分析結果と小栗栖(2011)の分類を尊重した変更であるが、西大寺本の位置づけについてはもう少し詳細な質的検討が必要であろう。

いずれにせよ、本研究の主たる分析対象であった新出の北粕谷区本は、熊野観心十

界曼荼羅定型本としては、愛知県での確認例として3例目となるが、既知の2例は乙系統に分類されるものであったので、それより表現形式の古い甲系統Ⅱ形式の例としては愛知県での所在確認例としては初出であり、那智参詣曼荼羅と同時に所蔵されていた例として9例目（甲系統の熊野観心十界曼荼羅との組み合わせとしては、紀三井寺穀屋寺本の1例に次ぐ2例目）であり、愛知県の例としては初めての組み合わせである。

謝 辞

本研究は、播磨学研究所の小栗栖健治先生の質的な分析による基本データを数値化して分析したこと、またこの北粕谷区本の原本調査の機会にお誘いいただいた上に、貴重なご助言をいただいたことを記し感謝の意を表します。また、その原本調査にいろいろな便宜を図ってくださった愛知教育大学の鷹巣純先生、所蔵者の知多市北粕谷区の区長（当時）青木守一様、北粕谷祭り保存会副会長の青木哲雄様、北粕谷祭り保存会でまた知多市文化財保護委員の久野與吉様、区長の青木利和様をはじめとする北粕谷区の皆様には、調査の機会を与えて下されたことと、貴重な情報をご提供下されたことを感謝申し上げます。

■引用文献

- 萩原龍夫 1983 巫女と仏教史—熊野比丘尼の使命と展開— 吉川弘文館
- 宮川充司 2012 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅳ)—階層的クラスター分析による小栗栖の分類枠の検証— 梶山女学園大学研究論集（人文科学篇），43, 9-21.
- 宮川充司 2013 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅴ)—階層的クラスター分析による穀屋寺甲本の位置づけ— 梶山女学園大学研究論集（人文科学篇），44, 11-25.
- 宮川充司 2014 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅵ)—階層的クラスター分析による別本・模写本の位置づけ— 梶山女学園大学研究論集（人文科学篇），45, 133-149.
- 小栗栖健治 2004 熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界（兵庫県立歴史博物館紀要），15, 129-242.
- 小栗栖健治 2011 熊野観心十界曼荼羅 岩田書院